

サミュエル・ジョンソンの『辞書』の 歴史的意義と問題点

—現代辞書への貢献とその再評価—

大 野 舞 子

はじめに

人が辞書を引くのはどういうときだろうか。電子辞書で、過去に国語辞典で調べた語句の履歴を見してみる。「肩透かし」「随一」。聞きなれない言葉の意味を調べるために、私は辞書を引く。では、英語ではどうだろう。英語の辞書が世に誕生したとき、人は何を目的としてその辞書を引いたのか。その理由を探ると、英語の歴史における辞書の存在がいかに大きな意味を持つかが見えてくる。

ここで、日本語と英語の言語的な違いについて考えておきたい。日本語というのは、文字表記とその発音が完全に一致している。しかし、英語にはつづり字と発音にずれがある。

A Table Alphabetically, conteyning and teaching the true writing, and understanding of hard usuall English wordes, borrowed from the Hebrew, Greeke, Latine, or French, & c. With the interpretation thereof by plaine English words, gathered for the benefit & helpe of Ladies, Gentlewomen, or any other unskilfull persons. (*A Table Alphabetically*, 1604 タイトル一節)

1604年に出版されたロバート・コードリー (Robert Cawdrey 1580-1604) の辞書にはこのような文章が添えられているが、この短い文の中でも、‘word’という単語の複数形の表記が統一されていない。そうした問題を孕む一文が「辞書」の序文だということだから驚きだ。この序文から考えられる当時の社会状況は、文書によるやり取りよりも、口頭でのコミュニケーションの方が活発であったということ、そのため、耳で聞き取った単語を文字に起こすと、人によって単語のつづりがバラバラになってしまったということである。しかし、コードリーが作り上げたのは難解語の辞書であった。日常語の表記のずれには本人も気づいていなかったか、あるいは、人々の間に急速に文字文化が広まり、「書かれた」文章を読むことの必要性が突如高まったせいなのかもしれない。

日本語辞書は、世の中で使われている言葉をそのまま取り上げ、一定の規則に従って並べ、その意味を端的に示せば良い。ところが英語辞書は違う。人によって異なるつづり字が使われている語句もあるため、まず取り上げる単語のつづりを一字一字定めるところから始めなければならなかった。「何を基準に文字を決定していくのか」その選択は極めて重要であり、「どうしたらそのつづり字や用法を確実なものにできるのか」そこには辞書づくりにおける発想の転換が必要であった。サミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson, 1709-84) の英語辞書 (*A Dictionary of the English Language*; 1755) は40,000語以上の語彙を収録し、そこに文学作品からの引用例文まで付け加えたものである。さらにそれが、国家や何か組織のプロジェクトとしてではなく、個人の手によって作られたという。ジョンソンの辞書について、その誕生の背景や、現代英語と英語の辞書に与えた影響について考察することで、その歴史的な意義を明らかにしたい。

1. ジョンソンの『辞書』：誕生までの背景

辞書が誕生するきっかけは、おそらく社会の動きの中に隠されている。何か人々の間に急速に文字文化が広まった出来事がないか、ここで考えてみたい。そこで、最初の英語辞書と言われるロバート・コードリーの *A Table Alphabeticall* (1604) の誕生よりもさらに時代を遡って、英国ルネサンス期以降の気になる事柄を挙げることにする。¹

1476年	ウィリアム・キャクストン (William Caxton, 1422?-91) による印刷術の導入
16世紀末	Martin Marprelate 論争によるパンフレットの流行
1620年代	イギリス初の新聞の1つ <i>Coranto, or Current of News</i> 発行
1642年	ピューリタン革命による劇場の閉鎖
1688年	名誉革命による政治パンフレットの氾濫
17世紀から	コーヒーハウスの隆盛
18世紀	<i>The Tatler</i> (1709-11), <i>The Spectator</i> (1711-12) をはじめとする、多くの日刊紙・週刊誌が誕生

まず、1476年のキャクストン (William Caxton: 1422?-91) による印刷術の導入。それ以前は写本であったため、世の中に出回る本数が極めて少なかった。写本から印刷された本への変化によって、多くの人の手に書物が行き渡るようになり、「読書」の習慣や書き言葉としての「言語」が広まったと考えられる。アメリカの言語学者 Albert C. Baugh は次のような見解を示している。

The result [the invention of the process of printing] was to bring books, which had formerly been the expensive luxury of the few, within the reach of all. More important, however, was the fact, so obvious today, that it was possible to reproduce a book in a thousand copies or a hundred thousand, every one exactly like the other.²

この頃はラテン語の作品も多かったようだが、印刷術の導入によって英語という言語が急速に広まったことは間違いないだろう。彼は続ける。

A powerful force thus existed for promoting a standard, uniform language, and the means were now available for spreading that language throughout the territory in which it was understood.³

次の Martin Marprelate 論争では、清教徒が英国国教会を攻撃するパンフレットを次々に発表した。パンフレットは無作為に街中でばら撒くようにして配られたのではないかと想像され、ここでも「読む」ことで情報を得るというスタイルが定着したように思う。配られ方に違いはあるが、「読む」スタイルに関しては、

イギリス初の新聞 *Coranto, or Current News* の発行についても同じことが言えるのではないだろうか。

ピューリタン革命の指導者クロムウェル (Oliver Cromwell: 1599-1658) は、賭け事、酒屋、演劇などの娯楽を一切禁止した。1642年には、ロンドン市内の統治権を掌握したピューリタンが劇場の閉鎖を命じたという。演劇が観られなくなったため、それまで芝居や物語を好んでいた人々が、同じく文化的な娯楽である「読書」へと新たな楽しみを見出したと考えても間違いではないだろう。

また注目しておきたいのがコーヒーハウスの隆盛である。17世紀中頃にオックスフォードで最初に開店し、ロンドンを中心に激増。多いときでは3,000軒もあったと言われており、ロンドンが文化の中心として確立されていたことがわかる。ロンドンのフリートストリート (Fleet Street) にあるコーヒーハウスにはサミュエル・ジョンソンもよく出入りしていたそう。コーヒーハウスは、あらゆる階層と職業の人間が集まって議論をするなど、情報交換の場としての重要な役割を果たしていた。後に誕生するリチャード・スティール (Richard Steele: 1672-1729) の *The Tatler* や彼とジョセフ・アディソン (Joseph Addison: 1672-1719) による *The Spectator* などの日刊紙・週刊誌やジョンソンも寄稿した *The Gentleman's Magazine* (1731-1914) はコーヒーハウスに置かれ、そこで多くの客に回し読みされたという。こうした定期刊行物が1700年代前半から次々と発刊された理由として、「出版認可法」の廃止が挙げられる。

17世紀以後の出版検閲の歴史を改めて振り返ってみると、何度かの曲折を経て、特に1662年に成立していた「出版認可法」が95年に廃止されてからは、出版が一気に活況を呈したことも注目に値する。ちなみに、最初の日刊新聞 *The Daily Courant* が出たのは1702年のことである。(佐久間, 120)

その後1731年から1780年にかけて、ロンドンのみでも約60種の新聞や雑誌が発行された。⁴ コーヒーハウスに集まる人々、そこへ持ち寄られる情報源、そしてコーヒーよりも刊行誌に群がる客と、彼らの期待に応えるかのようにさらに生み出される新聞・雑誌といった連鎖的な関係が、ここにくっきりと浮かび上がった。「文字文化」に関しては次のような記述もある。

アン女王が亡くなり、大土地所有階級に支持基盤があったトーリー党に

代わり、ホイッグ党のウォルポールの長期政権化で国内の安定が保たれていく中で、中産階級が経済的に大きな力をつけていくようになるにつれ、きわめて不完全ながら教育の普及、識字率の向上と相俟って、人々の文字文化への関心が急速に強まっていく。こうした背景があつて近代小説の発生、展開が可能になるのである。(佐久間, 120-121)

このように、英国ルネサンス期からの社会の動きを追ってみると、読書へと人々の関心が移るような出来事や、読書という文化を広め、さらに読者層を拡大させた要因がたくさん挙げられる。読書には辞書が欠かせない。なぜなら、文字を書く文人と、それを手にする一般の読者との間には、大きな語彙力の差があつたと考えられるからである。そこで、主に英語の難解語だけを集めた、雑誌・新聞などの一般の読者のための辞書が次々と誕生していくことになる。

英語辞書史——サミュエル・ジョンソンの英語辞書が登場する以前——

1604年	Robert Cawdrey, <i>A Table Alphabeticall</i>
1616年	John Bullokar, <i>An English Expositor</i>
1623年	Henry Cockeram, <i>The English Dictionarie</i>
1656年	Thomas Blount, <i>Glossographia</i>
1658年	Edward Phillips, <i>The New World of English Words</i>
1676年	Elisha Coles, <i>An English Dictionary</i>
1704年	John Harris, <i>Lexicon Technicum</i>
1706年	Edward Phillips=John Kersey, <i>New World of Words</i>
1708年	John Kersey, <i>Eictionarium Anglo-Britannicum</i>
1721年	Nathan Bailey, <i>An Universal Etymological English Dictionary</i>
1730年	Nathan Bailey, <i>Dictionarium Britannicum</i>
1736年	Nathan Bailey, <i>Dictionarium Britannicum</i> , 2nd edition
1749年	Benjamin Martin, <i>Lingua Britannica Reformata</i>

難解語辞書は収録語数2,500からスタートし、その後は既存の辞書を参考にしながら語彙を足していく形で次々と生み出されていく。この頂点とされるのがベリーの *Dictionarium Britannicum* (1730) である。収録項目はとうとう50,000に近づき、1736年の第2版に至っては収録項目の大幅な見直しが行われ、60,000を越える収録数を誇った。

実用的であったかどうかは別として、難解語の辞書ができ、人々は語彙力をつけた。そのことから、おそらく、「もっと多くの本を読みたい」、「社会情勢を知りたい」と知識欲が芽生えたはずだ。文字を書くことを生業とする文人にとっては、自分の思想・作品が世に広まり大きな利益となる、好ましい状況だったのではないかと考えてしまう。しかし、実際はそうではなかった。

I am desirous, if it were possible, that we might all write with the same certainty of words, and purity of phrase, to which the Italians first arrived, and after them the French; at least that we might advance so far, as our tongue is capable of such a standard.⁵

文字文化の発達に伴う言語の拡大によって、英語の用法、単語のつづりや意味などの統一性の欠如が浮き彫りになった。あの桂冠詩人と称されたジョン・ドライデン (John Dryden: 1631-1700) でさえ、自分の書いている英語が正しいのかわからずに頭を抱え、英語を一度ラテン語に直してから意味を理解するということがあったのだ。あまりにも有名で引用するのも気が引けるが、参考のために以下に引いておく。

...But how barbarously we yet write and speak, your lordship knows, and I am sufficiently sensible in my own English. For I am often put to a stand, in considering whether what I write be the idiom of the tongue, or false grammar, and nonsense couched beneath that specious name of Anglicism; and have no other way to clear my doubts, but by translating my English into Latin, and thereby trying what sense the words will bear in a more stable language.⁶

ここで、英語辞書の歴史に話を戻そう。コードリーの *A Table Alphabeticall* はまず一般大衆向けの難解語の辞書として誕生した。その方向性を保ったまま、既存の辞書を参考に収録語数を増やすという形で次々と新しい辞書が作り出された。*New World of Words* に関して言えば、法律用語や方言までもが含まれ、その収録語数は約38,000語にまで上っている。読書や学習の手助けといった目的を失い、前出の辞書に無い語彙を競って増やしていったようなこの一連の辞書編纂の流れには、私ですら疑問を感じてしまう。先のドライデンの当時の英語に対

する嘆きは1679年の記録であるが、30年余りの時を越えて、ジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift: 1667-1745) も英語の腐敗に頭を悩ませていた。

How then shall any man, who hath a genius for history equal to the best of the ancients, be able to undertake such work with spirit and cheerfulness, when he considers that he will be read with pleasure but a very few years, and in an age or two shall hardly be understood without an interpreter.⁷

これはスウィフトの *A Proposal for Correcting, Improving and Ascertaining the English Tongue* (1712) からの一節であるが、続く文章で、彼は英語アカデミーの設立を提案している。彼ら文人にとっては英語の混乱がいかに深刻であったか、そしてそれを食い止めることがどんなに急務であったかを察せずにはられない。

...if it [English] were once refined to a certain Standard, perhaps there might be Ways to fix it for ever or at least till we are invaded, and made a Conquest by some other State: And even then, our best Writings might probably be preserved with Care, and grow into Esteem, and the Authors have a chance for Immortality.⁸

1712年と言えば、収録数が40,000語近いカージーの辞書も誕生した後のことである。難解語の解説を目的とした辞書がいくらあろうと、ドライデンやスウィフトの嘆きは治まらない。彼らの求めている辞書は難解語の意味を人々に知らしめるものではなく、英語という言葉を固定するもの。英語が将来あまりにも簡単に変化するものであったとしたら、自分の文学作品が、後世の人々には全く読まれないものになってしまうからだ。難解語解説だけでない辞書は、文人としての生命や誇りを守るために必要不可欠である。そしてついに、英語辞書史上2番目に重要な辞書が誕生する。

2. ジョンソンの『辞書』の新しさ

ジョンソンの辞書 *A Dictionary of the English Language* は1755年4月15日に出版された。彼が辞書編纂を決意したのはドッズリー (Robert Dodsley 1703-64) らの出版業者からの要請があったためとされているが、実は依頼を受けるずっと前から、彼の頭の中には辞書編纂の計画があったようである。

Dodsley first mentioned to me the scheme of an English Dictionary; but I had long thought of it.⁹

1746年6月18日にジョンソンは出版業者と英語辞書編纂の契約を結び、その構想を「概略書」に示した。そしてそれをさらに加筆修正し、チェスターフィールド伯 (Earl of Chesterfield: 1694-1773) に捧げたものが *The Plan of a Dictionary of the English Language* (1747) である。ここに記されたジョンソンの言葉から、当時の混乱した英語に対する彼の見解が伺える。

The chief intent of it [an English Dictionary] is to preserve the purity and ascertain the meaning of our English idiom...¹⁰

ところで、ジョンソンが辞書編纂にあたってその土台としたのはベイリーの *Dictionarium Britannicum* (1736) であると言われているが、そのベイリーの前々作の辞書 *An Universal Ethmological English Dictionary* (1721) のタイトルの一節から、彼の辞書が誰を対象として編纂されているのかを見てみよう。

The whole WORK compl'd and Methodically digested, as will for the Entertainment of the Curious, as the Information of the Ignorant, and for the Benefit of young Students, Artificers, Tradesmen and Foreigners, who are desirous thorowly to understand what they Speak, Read, or Write.¹¹

そしてこれは、「紳士淑女、その他英語に熟練していない人々」という言葉で表された、コードリーが考える辞書の利用対象者と重なるところがあり、ベイリーの辞書はコードリーに始まる難解語辞書の系統に属すると考えてよいだろう。¹² 一方ジョンソンはというと、読者対象について下記のように述べている。

...it [your Lordship's patronage] may contribute to the preservation of antient, and the improvement of modern writers; that it may promote the reformation of those translators, who for want of understanding the characteristical difference of tongues,¹³ (下線は筆者による)

対象は作家や翻訳家など、職業として「言語」を操る者に向けられた。つまり、ジョンソンはベイリーの辞書を参考にしてはいるものの、全く異なる目的を持って辞書編纂に着手したということである。では、その目的とは何か。ジョンソンも、文人としておそらくドライデンやスウィフトらと同じように英語の混乱を嘆いていたと思われるのだが、彼は冷静に英語の現状を語っている。

When I took the first survey of my undertaking, I found our speech copious without order, and energetick without rules:¹⁴

その冷静さの裏で、新しい辞書編纂に熱を上げるジョンソンの姿が見て取れるのも事実だ。

THIS, my Lord, is my idea of an English Dictionary, a dictionary by which the pronunciation of our language may be fixed, and its attainment facilitated; by which its purity may be preserved, its use ascertained, and its duration lengthened.¹⁵

ジョンソンは辞書編纂の目的として、主に発音や用法の固定と、英語の純粹性の保持を掲げている。発音にまでは手が回らなかったが、用法を固定させるという点に関しては、日常語の収録を大幅に拡大し、語義を体系的に区分した上、語義解釈の手助けとなるよう厳選した引用例文を多数採用することで、目的を果たそうとした。英語の固定を目指したジョンソンの辞書と、それまでのコードリーに始まる難解語の辞書との差異は、次章で例を用いてより具体的に論ずる。

3. 具体例分析 — come —

さて、難解語辞書の流れを断ち切って誕生したジョンソンの英語辞書にはどのような特徴があったのか、comeという単語を例にとって見てみよう。comeを選んだのには理由がある。まず、後に示すジョンソンの辞書の大きな特徴として「日常語の収録」が挙げられ、comeが使用頻度の高い日常語であるためである。そして2点目は辞書編纂の進行状況が関係している。

辞書編纂の進行状況の詳細はわからないが、ジョンソンの友人バーチ博士 (Dr. James Birch) によれば、1748年8月までには書写人たちは引用例文をほとんど書き写し終え、1749年9月頃までには原稿の一部は印刷所へまわす用意ができており、1750年10月20日までには120シート (AからCの部まで) が刷り上っていたという。

——中略——

ついでに付言しておく、年数の計算から簡単にわかるように、第2巻に要した時間は第1巻に要した時間よりもはるかに短く、それだけ仕事になれてきた結果でもあるが、完成を急がざるを得なかったため拙速に傾いたのも事実である。¹⁶

参考資料とした *A Dictionary of the English Language* は第2版の復刻版であると思われ、第1巻に収録されている語の方がジョンソンの構想を忠実に表現できていると考えた。

ジョンソンの辞書において、comeはTo COMEという見出し語で表され、品詞、過去形・分詞の形、語源と続き、行を変えて語義の説明が始まる。

To COME. *v. n. pret. came, particip. come.* [coman, Saxon; komen, Dut. *kommen*, German.]

1. To remove from a distant to a nearer place; to arrive. Oppose to *go*.

- And troubled blood through his pale face was seen To *come* and go, with tidings from the heart. *Fairy Queen.* (I-III 1590, IV-VI 1596)
- Caesar will *come* forth to-day. *Shakesp. Julius Caesar.* (1599)
- *Coming* to look on you, thinking you dead, I spake unto the crown as having sense. *Shakesp. Hen. IV.* (1597-8)

- The colour of the king doth *come* and go,
- Between his purpose and his conscience. *Shakesp. K. John.* (1596-7)
- The Christmas having stood almost all the day in order of battle, in the fight of the enemy, vainly expecting when he should *come* forth to give them battle, returned at night into their camp.

Knolles's History of the Turks. (1603)

- 'Tis true that since the senate's succour *came*, They grow more bold.

Dryden's Tyrannick Love. (1669)

- This Christian woman!

Ah! there the mischief *comes*. *Rowe's Royal Convert.* (?/ 1674-1718)

2. To draw near; to advance towards.

- By the pricking of my thumbs, Something wicked this way *comes*.

Shakesp. Macbeth. (1606)

5. To advance from one stage or condition to another.

- Trust me, I am exceeding weary. —

— Is it *come* to that? I had thought weariness durst not have attacked one of so high blood. *Shakesp. Henry IV. p. ii.* (1597-8)

- Though he would after have turned his teeth upon Spain, yet he was taken order with before it *came* to that. *Bacon.* (?/ 1561-1626)

- Seditious tumults, and seditious fames, differ no more but as brother and sister; especially if it *come* to that, that the best actions of a state are taken in ill sense, and traduced. *Bacon, Essay 16.* (?/ 1561-1626)

- His soldiers had daily divers skirmishes with the Numidians, of that once the skirmish was like to *come* to a just battle.

Knolles's History of the Turks. (1603)

- When it *come* to that once, they that had most flesh wished they had had less. *L' Estrange.* (?/ 1616-1704)

- Every new sprung passion is a part of the action, except we conceive nothing to be action 'till the players *come* to blows.

Dryden on Dramatick Poetry. (1688?)

- The force whereby bodies cohere is very much greater when they *come* to immediate contact, than when they are at ever so small a finite distance.

Cheyne's Phil. Prin. (?/ 1671-1743)

comeの語義分類の項目数は56。そのうち16以下は成句となっている。第1, 2, 5項の語義を抜粋した。ただし、引用例文の文頭の「・」、文末の作品名の出版年および作者生存年は、便宜上筆者が付け加えたものである。引用例文は第52項To Come up.と第55項To Come up with.を除く、56項目中54項目の語義に最低でも1つずつは付されており、全ての引用文にはその出所である作品または著者の名前が記されている。

さて、*Dictionary*の特徴である「日常語の収録」だが、ジョンソンが土台としたとされるベイリーの辞書と比較すれば、その収録内容の違いは明らかである。

Bailey, *Dictionarium Britannicum* (1736) における come の語義
to draw nigh, to approach; to attain to, to accost, to amount to, to end, to be the consequence of, to succeed, to agree to

comeが様々な意味を有していることはわかるが、語義説明としてはあまりにも簡潔すぎる。*Dictionary*では、上記の3つの語義項目を例に挙げてみても、まず語義をその内容ごとに細かく分類するという工夫が施されている。また、第2項に関してはベイリーと同様に単語の言い換えによる説明方法を採用しているものの、第1, 5項では数多くの引用例文を参照することができ、単に語義を理解するだけでなく、その用法をも自らの知識とすることができるのだ。さらに、ジョンソンの辞書の語義がいかに豊富であるかという点に関して、永嶋大典による、ジョンソンの辞書と*OED*の成句収録数の比較を参考に分析した。*OED*にあつてジョンソンの辞書にない成句は13種類である。¹⁷

< *OED* にあつて *Dictionary* にない成句 >

come across, come round, come under, come unto, come within, come abroad, come along, come away, come back, come down, come forth, come forward, come out of

*OED*には古語や廃語も含まれていること、ジョンソンの辞書がエリザベス時代の英語を収録の上限としていることなどから、*Dictionary*の成句収録の完成度の高さを主張している。さらに付け加えれば、*OED*にあつて*Dictionary*にはない成句を細かく見てみると、come across, come round, come withinの3つは*OED*による語句の初出の時期がそれぞれ1810年、1826年、1818年となっており、ジョ

ンソンの辞書編纂時には見られなかったか、あまり一般的ではなかった用法であると言えるだろう。また、come abroadは成句としては語義項目に取り上げられていないが、comeの第3語義の引用例文中に登場している。¹⁸ ジョンソンの成句収録の正確さが、これでまた少し高められたことになる。

さて、OEDとの比較に関連して、今度は各語義項目の中身の配列について検証したい。OEDといえば、「歴史的原則による英語辞書」という点がその最大の特徴である。

1150年以後の英語の文献に見られる語の歴史——特につづり字・語義の発達——を明らかにしている。新語・新語義が初めて使用されたのはいつか、廃語・廃語義はいつそうなったのか、などが豊富な用例で説明され、個々の語の過去と現在を知ることができる。¹⁹

では、ジョンソンの辞書はどうだろうか。各語義項目における引用例文をどのような順序で配列したのか、*Dictionary*の序文で彼はこう述べている。

The solution of all difficulties, and the supply of all defects, must be sought in the examples, subjoined to the various senses of each word, and ranged according to the time of their authours.

(Samuel Johnson, “Preface” to the *Dictionary*, 1755)

実際に引用例文を見てみよう。先に述べたように、To COMEの第1, 2, 5項に収録されている引用例文に、その典拠となる作品の出版年を、作者名のみの記載、あるいは作品の出版年が特定できなかったものには、作者の生存年を記した。第1項のShakespeareの引用例文については、必ずしも出版年順とは言えないが、その誤差はわずかに1, 2年という範囲に収まっている。第5項に関しても同様で、具体的な出版年・発表年を断言できない部分はあるが、引用例文を「年代順に配列した」というジョンソンの言葉に間違いはないようだ。

辞書編纂にあたって、前例のない新しいことに挑戦し、随所に工夫を凝らしてきた彼は、引用例文の配列だけでなく語義の配列にもこだわりを見せている。ジョンソンが考える日常語の語義配列は、(1) 本来の意味、(2) 間接の意味、(3) 隠喩の意味、(4) 詩の意味、(5) 口語の意味、(6) 茶化した意味、(7) 特定個人に見られる独特な意味という順序がよいとしている。²⁰ 先ほど例に挙

げたcomeにもこの基準が当てはまるか、検証を試みた。しかし、comeの間接的意味や隠喩的意味等を明確に区別するのは難しい。そこで、語義とともに引用例文の数にも着目しながら語義の配列を見てみたい。comeの*Dictionary*における語義と引用例文の数を()内に示し下記のようにまとめた。

1. To remove from a distant to a nearer place; to arrive.
Oppose to *go*. (7)
2. To draw near; to advance towards. (1)
3. To move in any manner towards another; implying the idea of
being received by another, or of tending towards another. (9)
4. To proceed; to issue. (2)
5. To advance from one stage or condition to another. (7)
6. To change condition either for better or worse. (4)
7. To attain any condition or character. (4)
8. To become. (2)
9. To arrive at some act or habit, or disposition. (1)
10. To change from one state into another desired. (3)
11. To become present, and no longer future. (1)
12. To become present; no longer absent. (3)
13. To happen; to fall out. (2)
14. To follow as a consequence. (1)
15. To cease very lately from some act or state; to have just done or
suffered any thing. (1)

語義の第1項はto arrive, oppose to *go* と言い換えられており、最も基本的な意味であると言える。第2項は引用例文の数は1例と少ないが、to draw nearはベリーの辞書における第1項目の語義to draw nighと対応しており、comeの一般的な用法であると言えるだろう。第3項については引用例文の数の多さから、頻繁に使われたcomeの語義であると考えられる。第4項は引用が2例と少ないが、その2つとも聖書からの引用である。²¹ この観点から、第4項の語義はそれほど一般的ではないものの、特別に神聖な意味を込めて上位に挙げている可能性がある。続く第5項も引用例文が多く、第6項以下は徐々に例文の数が少なくなっているため、comeの本来の語義とは遠いものと推測できる。このように、

ジョンソンは、語義を細かい項目に分類し、さらにその一つ一つを吟味しながら、配列を決定している。ある一定の基準を設け、ここまで体系的に編纂された辞書というのは、おそらくジョンソンの辞書が初めてではないだろうか。

また、ジョンソンの辞書に新しく加えられた要素として忘れてはならないのが「アクセント表記」である。comeは単音節の単語であるため参考にならなかったが、comeの直前の見出し語で3音節のcombustionを見てみると、‘COMBU’SITION.’というように、アクセントの位置が示されている。ちなみに、ジョンソンは語の発音も収録する予定であつたらしい。しかし、当時は音声学がまだ発達しておらず、ジョンソン自身、音声学に弱かったということをPlanの中で認めている。²²

4. ジョンソンの課題と現代辞書への貢献

これまで見てきたように、ジョンソンの辞書はそれ以前の難解語辞書を参考にしながらも、全く新しい発想を持ってつくられたことがわかる。そこで、前章で述べたDictionaryの特徴をもとに、現代の英和辞書とも比較しながら、ジョンソンの辞書の課題と現代英語や英語辞書史に与えた影響を考察したい。

まずはジョンソンの最大の功績ともいえる日常語の収録と豊富な語義説明の導入である。それまで辞書に載ることすらなかった日常語は、Dictionaryにおいて初めてそのつづり字を確かめることができるようになった。comeのような不規則動詞であれば、過去・分詞形も示されている。しかし、ただ単に「comeの過去形はcameである」と書かれているだけで、人はその辞書のつづり字や用法を、自信を持って真似することができたのだろうか。そう問われたら、私は首を横に振る。では、Dictionaryはなぜ信頼を勝ち得たのか。答えは、語源の掲載によって、全くのでたらめではなく言語学的分析に基づいてつづり字が決定されたと言えること、そして引用例文によって著名な文人たちに裏付けられた用法を読者に提示できたことによるところが大きい。comeと同様、かつてwords, wordsと誤って表記された名詞の複数形も、引用例文を見れば正しいつづり字は明らかだ。このように、日常語の収録という特徴は、語源と引用例文の導入という他の要素も加わることでさらにその信頼性・意義が高められ、つづり字の固定を促進させたことは言うまでもない。

また引用例文を語義説明として扱ったことに関しては、他の辞書編纂者とは異なり、文学者ジョンソンだからこそできた発想であり、普段から過去の文学

作品に触れている者でなければ、気が遠くなるほど大量の文献を読み漁るこの作業に到底耐えられまい。前章の *Dictionary* における To COME の項を再び例に取るが、ここに抜粋した16の引用例文のうち5つがシェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の作品から引いたものであり、他の単語の項目を見ても、シェイクスピアからの引用が極めて多い。ジョンソンは、*Dictionary* の後にシェイクスピア作品を校訂し注釈をつけるなどした『シェイクスピア全集』(1765) を出版しており、辞書の編纂作業の苦労を執筆活動に活かしているところも見事である。前置きが長くなったが、引用例文を載せるというアイディアは今日の英和辞書にも生きている。『研究社新英和大辞典』(第6版, 東京: 研究社, 2002. p.499) come 15 [過去分詞の特別用法]:

A Daniel ~ to judgement! (Shak., *Merch* V 4.1. 223) 名裁判官ダニエル様の再来だ

『研究社新英和大辞典』と『ジーニアス英和大辞典』を見る限り、今日の英和辞書においては語義解説に文学作品からの引用例文を使用することは珍しい。この『研究社新英和大辞典』の第15項は上記のように「過去分詞の特別用法」とあり、わかりづらい使い方であるために、シェイクスピアの例を用いてこの用法を確かなものにしているようだ。残念ながら、ジョンソンの辞書にはこれと同じ例文は見られなかった。しかし、語義解説の手助けとして引用例文を載せたことがジョンソンのアイディアに起因しているのは、紛れもない事実である。

ここで『研究社新英和大辞典』comeの語義第1項から第5項を参考までに引いておく。ただし、詳細な語義解説と、例文は省略した。尚、自動詞としての語義は全16項である。

- 1 a <人が> 来る, やって来る.
 b <人・物が> (ある特定の場所に) 来る, 到着する, 届く (arrive).
 c [~to doまたは~and] <...しに> 来る.
- 2 a 届く, 達する, 及ぶ.
 b (情緒・知性の面で) 響く, こたえる, 痛感される.
- 3 a [ある状態・関係などに] 移る, 入る, なる [to].
 b <...するように> なる <to do>.

- c […の額に] 上る, なる (amount), (結局) […]になる, 帰着する [to].
- 4 [形容詞または過去分詞の補語を伴って] <…に> なってくる, 到る (become).
- 5 a <時が> 至る, 来る; 現れる, めぐってくる, 到来する.
- b 《口語》[假定法現在形を接続詞的に用いて] <…が> くると.
- c [to come の形で名詞に伴って] 将来の, 未来の.

注目したいのは語義配列である。日本人にとっては「come = 来る」という認識が一番強く、この辞書が使用頻度の高い順に語義を並べていることがわかる。正確に言うと、これは歴史的配列と頻度順配列の間にあたる「折中の配列」で、使用頻度や語義間の関連などを考慮し、編集者の判断で語義配列が決められている。²³

繰り返しになるが、ジョンソンの辞書における語義配列は基本的には頻度順であり、各語義項目の中の引用例文の順序は歴史的配列である。頻度と歴史の両面を意識していることから、*Dictionary*も折中の配列の要素が強いと言える。つまり、ジョンソンは使いやすさをも念頭に置いていた可能性が高い。より多くの人に読んでもらえる辞書をつくらなければ、「英語の固定」が成し遂げられないからだ。ここに、*OED*との比較ではわからなかった、「読み手の実用性」という *Dictionary* と現代辞書との新たな共通項の発見があった。

もちろん、ジョンソンの辞書には欠点があることも忘れてはならない。*Dictionary* における語源の記載については、つづり字の信頼性を高めたと評価したが、

Its etymologies are often ludicrous. It is marred in places by prejudice and caprice.²⁴

と Albert C. Baugh から厳しい評価を与えられているのは有名な話である。しかしジョンソンを弁護するならば、辞書における発音や語源などの項目は、専門家に執筆を依頼するほど特に専門知識を必要とする分野であるということだ。不完全に終わった語源と同様、発音表記の欠如はジョンソンにとっても後悔の残る点であろう。彼の影響力を表すエピソードとして *ache* という単語の勘違いが挙げられる。*OED* によればジョンソンは、本来語源の異なる 2 つの単語 *ache*

(名詞)とake(動詞)を同じ語から派生したものと誤認し、*Dictionary*において、その2語をacheという1つのつづり字に固定してしまった。akeはもはや使われない単語になったが、これがジョンソンの仕業だという。²⁵ このエピソードによって再びジョンソンの語源に対する知識不足を指摘する結果となってしまったが、裏を返せば、やはり*Dictionary*が多くの人に読まれ、さらに後に誕生する多くの辞書の手本となった証拠である。英語という一つの言語に、これほどの影響力を及ぼせたのだから、「*Dictionary*の収録単語に発音表記が付けられていたらどうなっていただろう」と想像せずにはいられない。

おわりに

永嶋大典は『ジョンソンの『英語辞典』—その歴史的意義—』において、*Dictionary*と*OED*を比較し、ジョンソンの功績を称えている。しかし、その功績は、単に英語辞書の範囲に止まるものではない。*Dictionary*の編纂にあたって新しく取り入れられた英語辞書の要素である、日常語の収録・語義の細かな区分・豊富な引用例文の掲載・アクセントや語源の提示は、250年という時代を経てもなお、現代の辞書に生き続けているばかりでなく、英和辞書においても基本的事項として踏襲されているのだ。ジョンソンの辞書を論ずるにあたって、単に英語辞書に限定して評価を下したのでは物足りない。

さて、*Dictionary*と言えば、Johnsonianとも呼ばれるジョンソン独自の語の定義も特筆すべき点であった。²⁶ 最後に、ジョンソンのおかげで非常に有名となった単語に触れておきたい。

OATS, n. s. [...] A grain, which in England is generally given to horses, but in Scotland supports the people.

(Samuel Johnson, *A Dictionary of the English Language*, 1755)

「イングランドでは馬の餌とされるが、スコットランドでは国民の食糧とされている穀物。」たしかにこれでは的確な語義説明になってはいない。スコットランドの人は憤慨したのだろうか。しかし、私たちがこれを読んだらどうだろう。きっとこのJohnsonian Definitionをおもしろいと感じた人は多いはずだ。かつて日本にもこんな辞書があった。

Love laughs at distance. 惚れて通へば千里も一里。

(斉藤秀三郎『熟語本位英和中辞典』岩波書店, 1951)

ジョンソンの皮肉とは趣向が異なるが、このユーモアが堅苦しい辞書のイメージを払拭し、私たちに親しみを持たせる。それならば、ジョンソンの辞書に稀に登場する彼独自の皮肉な定義は人を笑わせたかもしれない。英語の混乱によって急がれた辞書編纂であったが、サミュエル・ジョンソンという男は、現代にも通用する辞書の概念を打ち立てただけでなく、人々に言語や文学の喜びをも教えたのである。

Notes

¹ 永嶋大典, 『ジョンソンの『英語辞典』—その歴史的意義—』東京: 大修館書店, 1983, pp.344-345.

John Bullokar の *An English Expositor* (1616) を最初の英語辞典とする考えもあるが、Bullokar の *Expositor* は Cawdrey の *Table* をもとにしたものであり、今日では Cawdrey の *Table* を最初の英語辞典と見なすのが普通である。

² Albert C. Baugh, *A History of the English Language*. 2nd ed. (New York: Appleton-Century-Crofts, Inc., 1963), p.241.

³ Ibid., p.241.

⁴ 永嶋大典, 『ジョンソンの『英語辞典』—その歴史的意義—』東京: 大修館書店, 1983, p.73.

『スペクテイター』の成功が誘因となって、18世紀に多くの日刊紙、週刊誌類が生まれたことは周知のとおりである。1724年には日刊紙3種、隔日刊紙7種(うち2種は夕刊)、週刊誌6種が発行されており、また1731年から1780年にかけてロンドンのみで約60種もの新聞・雑誌が発行された。

⁵ Albert C. Baugh, op. cit., p.309.

ドライデンが、サザランド伯に捧げた献辞 *To the Right Honourable Robert, Earl of Sutherland* の一節。Shakespeare の *Troilus and Cressida* を改作した同名の劇作(1679)に付した。

⁶ Ibid., p.309.

⁷ Ibid., p.314.

このProposalは、大蔵大臣オックスフォード伯ロバート宛の書簡 (*In a Letter to the Most Honourable Robert Earl of Oxford and Mortimer, Lord High Treasurer of Great Britain*) という形式で、英語アカデミーの設立を建議したものである。

⁸ Ibid., pp. 315-6.

⁹ 永嶋大典『ジョンソンの『英語辞典』—その歴史的意義—』東京：大修館書店，1983, p.119.

¹⁰ Samuel Johnson, *The Plan of a Dictionary of the English Language* (1747)

¹¹ Nathan Bailey, *An Universal Etymological English Dictionary* (1721)

¹² 主な難解語辞書の、利用対象者に関する言及（下線は筆者による）

Robert Cawdrey, *A Table Alphabeticall* (1604)

A Table Alphabeticall, conteyning and teaching the true writing, and understanding of hard usuall English wordes, borrowed from the Hebrew, Greeke, Latine, or French, & c. With the interpretation thereof by plaine English words, gathered for the benefit & helpe of Ladies, Gentlewomen, or any other unskilfull persons.

Henry Cockeram, *The English Dictionarie* (1623)

Enabling as well Ladies and Gentlewomen, young Schollers, Clarkes, Marchants, as also Strangers of any Nation, to the understanding of the more difficult Authors already printed in our Language, and the more *speedy attaining of an elegant perfection* of the English tongue, both in reading, speaking and writing.

John Kersey, *Dictionarium Anglo-Britannicum* (1708)

...The whole Work Compil'd and Methodically Digested, for the Benefit of Yong Students, Tradesmen, Artificers, Foreigners, and others, who are desirous thoroughly to understand what they Speak, Read, or Write.

¹³ Samuel Johnson, *The Plan of a Dictionary of the English Language* (1747)

¹⁴ Samuel Johnson, "Preface" to the *Dictionary* (1755)

¹⁵ Samuel Johnson, *The Plan of a Dictionary of the English Language* (1747)

¹⁶ *A Dictionary of the English Language* (1755) は全2巻であり、第1巻は'A'か

ら '(To) KYD' までの語が収録されている。引用は、永嶋大典、『英米の辞書—歴史と現状—』東京：研究社、1974, p.127

¹⁷ 永嶋大典『ジョンソンの『英語辞典』—その歴史的意義—』東京：大修館書店、1983, p.198.

COME

(ii) ジョンソンにあって *OED* にないもの：

come after, come in for, come off from, come up to, come up with

ただし筆者によれば、(ii) come in for は *OED* の中で to come in for という小見出しで収録されており、come in for ではなく come in to の誤りであると思われる。ここでは、両辞書における come in for の語義は考慮しないものとする。

o. *to come in for*: to be included among those who receive a share of anything; to receive incidentally. Phr. *to come in for it*, to incur punishment or a rebuke. *colloq.* (*OED*, p.525)

27. *To COME in for*. To be early enough to obtain: taken from hunting, where the dogs that are slow get nothing. (*Dictionary*)
(引用例文省略、以下同様。)

28. *To COME in to*. To join with; to bring help. (*Dictionary*)

29. *To COME in to*. To comply with; to agree to. (*Dictionary*)

¹⁸ Samuel Johnson, *A Dictionary of the English Language* (1755)

As soon as the commandment came abroad, the children of Israel brought in abundance the first fruits. 2 Chron. xxxi. 5.

¹⁹ 佐藤 弘『英語辞書の知識』東京：八潮出版社、1977, p.111.

²⁰ 永嶋大典『ジョンソンの『英語辞典』—その歴史的意義—』東京：大修館書店、1983, pp.64-65.

²¹ Samuel Johnson, *A Dictionary of the English Language* (1755)

Behold, my son, which came forth of my bowels, seeketh my life.

2 Sa. xvi. 11.

I came forth from the father, and am come into the world. Jo. xvi. 28.

(下線は筆者による)

²² Samuel Johnson, *The Plan of a Dictionary of the English Language* (1747)

sounds are too volatile and subtile for regal restraints; to enchain syllables,

and to lash the wind, are equally the undertakings of pride, unwilling to measure its desires by its strength.

- ²³ 佐藤 弘『英語辞書の知識』東京：八潮出版社，1977，pp.62-65.

主な辞書の語義配列

歴史的配列：OED (*The Oxford English Dictionary*, Oxford, 1974),
Webster (*Webster's Third International Dictionary of the English Language*, Merriam, 1961),
『岩波英和辞典』(岩波書店，1958) など。

頻度順配列：Standard (*A New Standard Dictionary of the English Language*, Funk & Wagnalls, 1913),
『新コンサイス英和辞典』(三省堂，1975) など。

折中の配列：COD (*The Concise Oxford Dictionary of Current English*, Oxford, 1976),
『研究社新英和大辞典』(研究社，1960),
『岩波英和大辞典』(岩波書店，1970) など。

- ²⁴ Albert C. Baugh, *A History of the English Language*. 2nd ed. (New York: Appleton-Century-Crofts, Inc., 1963), p.327.

- ²⁵ 永嶋大典.『OEDを読む』『オックスフォード英語大辞典』案内』東京：大修館書店，1983，pp.88-90.

- ²⁶ Albert C. Baugh, *A History of the English Language*. 2nd ed. (New York: Appleton-Century-Crofts, Inc., 1963), p.327.

Its definitions, generally sound and often discriminating, are at times truly Johnsonian.

Bibliography

- Baugh, Albert C. *A History of the English Language*. 2nd ed. New York: Appleton-Century-Crofts, Inc., 1963.
- Cawdrey, Robert. *A Table Alphabeticall*. London: 1604. rpt. New York: Da Capo Press, 1970.
- Crystal, David. *English as a Global Language*. 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press, 2003.
- Page, Norman. *Dr Johnson – Interviews and Recollections*. New Jersey: Barnes &

- Noble Books, 1987.
- Samuel, Johnson. *A Dictionary of the English Language*. 1755. rpt. London: Times Books, 1979.
- Simpson, J. A. and Weiner, E. S. C. eds. *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Oxford: Clarendon, 1989.
- 菊池清明, 唐澤一友, 堀田隆一, 貝塚泰幸編『英語史: 現代英語の特質を求めて—多文化性と国際性—』大阪: 関西人文科学出版会, 2008.
- 小西友七, 南出康世他編『ジーニアス英和大辞典』東京: 大修館書店, 2001.
- 佐久間康夫, 中野葉子, 太田雅孝他『概説イギリス文化史』京都: ミネルヴァ書房, 2002.
- 佐藤 弘『英語辞書の知識』東京: 八潮出版社, 1977.
- 竹林滋他編『研究社新英和大辞典』第6版, 東京: 研究社, 2002.
- 永嶋大典『英米の辞書—歴史と現状—』東京: 研究社, 1974.
- 永嶋大典『OEDを読む『オックスフォード英語大辞典』案内』東京: 大修館書店, 1983.
- 永嶋大典『ジョンソンの『英語辞典』—その歴史的意義—』東京: 大修館書店, 1983.
- 宮崎芳三, 水越久哉『イギリス文学者論—過渡期としての第18世紀—』神戸: 松蔭女子学院大学・松蔭女子学院短期大学学術研究会, 1991.

Historical Significance and Problems of Samuel Johnson's *Dictionary* :

Its Contribution and Reassessment to Modern Dictionaries

Maiko Ohno

Abstract

Many authors in the seventeenth and eighteenth centuries were deeply worried about the confusion of English. John Dryden (1631 - 1700) put it this way: "There seemed to be no order in it unlike Latin." Jonathan Swift (1667 - 1745) made a similar point. By the development of journalism in the early 18th century people came to get many chances to read written words and at the same time they discovered the chaos and confusion in English. Some dictionaries with a large vocabulary were published at that time; however, they never put a stop to the corruption of English.

Samuel Johnson (1709 - 1784), who had a high popularity in the world of journalism, was expected to save the language by his calm analysis of the situation. And he accepted the offer of editing an English dictionary. Thus *A Dictionary of the English Language* (1755) was completed. Johnson adopted new ideas in his *Dictionary*. They include gathering usual English words, fixing spelling, classification of meaning, tens of thousands of quotations from literary works, and showing the stress marks and the origin of a word.

Those factors still used in dictionaries today; what's more, Johnson's ideas

passed across borders and were adopted in English-Japanese dictionaries. In this paper, I would like to reassess Samuel Johnson's achievement.